

# 身近な生物の認識に影響を与える生物及び社会属性の分析～15年間の行政統計のアンケート調査を基にした分析から～

著者	今井 はるか
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第19385号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129329">http://hdl.handle.net/10097/00129329</a>

# 要 約

## 身近な生物の認識に影響を与える生物及び社会属性の分析 ～15年間の行政統計のアンケート調査を基にした分析から～

今井 はるか

本研究では、生物多様性に依拠した文化的サービスの評価に向けた研究として、生物多様性が芸術やデザインなどの文化に影響を与えるプロセスを整理し、順序立てて明らかにすることを目指した。生物多様性から文化的サービスが派生するプロセスには、①人が生物多様性を認識し、②認識した生物多様性が文化に反映される、という2段階を仮定し、本研究では、①人が生物多様性を認識するという点について、人と自然のつながりの概念も意識しながら明らかにすることを目指した。

第1章では、研究背景として、人と自然のつながりの重要性や、生態系サービスの評価が求められるようになった経緯等の概要を述べた。また、生物多様性が文化的サービスに与える影響の評価に向けた足掛かりを作るという本研究の位置づけを示し、生物の認識という点での自然とのつながりとその変化について明らかにするという研究目的を述べた。なお、生物の認識には、生物側の要因（生物属性）と人間側の要因（社会属性）が影響を与えると考えられるため、生物属性と社会属性の両面からの影響を同時に評価し、総合的な視点で、生物の認識に与える影響を明らかにすることを目指すこととし、具体には、生物種・住環境・世代の違いが生物の認識にどのような影響を与えるのかを解析した。

第2章では、方法論として、研究を行うにあたり着目したデータ及び手法について、その新規性や妥当性、今後の発展性を俯瞰した。特に、本研究では、政策と行政のつながりの強化や、行政統計の二次利用の推進に向けた動きも踏まえ、信頼性・網羅性の高い行政統計の利活用に力点を置いており、筆者の行政機関での職務経験も踏まえつつ、行政統計の利活用について議論を深めた。

また、本研究で具体的に活用する仙台市の「身近な生きもの認識度調査」及び「仙台市自然環境基礎調査」について、その概要と本研究での活用の仕方（指標の生成）について説明を行った。

第3章では、自然とのつながりが特に重要だと考えられている「子ども」を対象に、生物種の違いと住環境の違いに着目し、生物の認識と認識の変化に与える生物属性を明らかにすることを目的とした解析を行った。

解析の結果、生息環境が里山に限られる種や、鳴き声に特徴があっても、単独で行動するなど視認性が低い種では、認識されにくいことや、個体数が減少している種や、昆虫類や両生類などの一般的に人からの好感度が低い種、また、もともと認識されにくい種では、認識されにくくなりやすいことが明らかとなった。さらに、近年は、住環境に関係なく、市域全体で子どもが生物を認識しにくくなりつつあることが明らかとなった。

第4章では、第3書で着目した生物属性の影響に加え、子どもと大人で生物の認識の違いを比較することにより、生物の認識に影響を与える社会属性に重点を置いた解析・考察を行った。

解析の結果、総じて、住環境に関わらず、大人の方が子どもよりも生物を認識しやすいことが明らかとなり、要因として、生物の検知力や、子どもの頃の自然体験や、自然・生物の知識の学び方の違いなどが可能性として挙げられた。

最後に第5章では、第3章及び第4章を踏まえ、生物の認識と、その変化に影響を与える生物及び社会属性について総合的な考察を行うとともに、本研究が達成した内容について総括した。また、生物の認識の違いが文化的サービスにどのように影響しているのか等、今後の研究の展望を述べた。さらに、本研究から得られた、人と自然とのつながりの強化に向けた提案や、行政統計のさらなる活用への提案を行った。